

都市神社の運営形態と構築ネットワークに関する研究

—東京都中央区日本橋地区を事例として—

宇野研究室

4112629 田中 達朗

1. 序

1.1. 研究の背景と目的

2011年3月11日に発生した東日本大震災によって東京都で352万人、首都圏において515万人の帰宅困難者（＝帰宅難民）が発生した。これは地震発生時の外出者の28%にあたる¹⁾。東日本大震災以降、東京という都市の抱える問題が浮き彫りになった。

一方、関東圏では、特に江戸時代、城下町の商業地として栄えた地域には民間信仰としての神社が点在している。今日においてもビルの隙間などの独特の環境の中で残っている。建て替わりの激しい東京の都市空間のなかで失われずに残る神社は、地域性と独立性を持つ不動点であり、そのまちごとに重要かつ固有の役割を果たしていると考えられる。

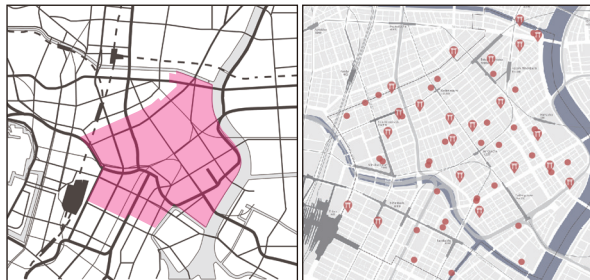
本研究では、日本橋地区において神社の運営形態と背後に構築される人的ネットワークを明らかにする。また災害時に働くシステムへの応用可能性を考察し、首都直下型地震の発生が有力視される将来に向けて提言を行うことを目的とする。

1.2. 研究の対象地域

旧東京市日本橋地区（現東京都中央区の一部）を対象とする。江戸時代、商業地として栄え様々な需要に応えるために神社が増加した。現代ではその数は減少傾向にはあるものの、東京都23区別の神社の密度において3位となっており²⁾、今でも多くの神社が残存している。近年、中央区の人口増加に伴い新旧住民のコミュニケーション不足が問題視されるこの地で、神社がまちにおいて果たす役割を解明することには意義があると考えられる（図1）。

1.3. 研究の構成と研究方法

本研究ではまず、現地調査により日本橋地区の神社の存続と管理状況について把握する。次に、神社を管理する方へのヒアリング調査から神社の歴史や運営形態について明らかにし、神社が構築する人的



▲図1 対象エリア

▲図2 調査対象の神社

ネットワークについて考察する。最後に今後予想される災害に向けて人的ネットワークの応用可能性を探り、未来に向けて都市モデルを構想する。

2. 神社の存続と管理状況

2.1. 概要

神社の存続と管理状況について把握するため、2013年4月26日～6月26日の期間に現地調査を行った。調査対象は2007年の調査³⁾で明らかになった対象地域内の神社である。

2.2. 神社の存続

調査対象とした神社は全部で56社である⁴⁾（図2）。2008年の調査⁵⁾と比較すると、53/56社の神社が現在も当時の敷地に存在していた。また、移転、一時移転、仮設移転しているものがそれぞれ1社ずつ確認できた。敷地移転した福德神社は、再開発事業によりビルの屋上から防災拠点をかねた公園に併設される形で地上に移転した。一時移転した水天宮は、本殿の耐震工事のため人形町に移転している。6年間という限られた時間での比較ではあるが、廃社となった神社はなかった。

2.3. 神社の管理状況

神社の管理状況について調査した。管理とは植栽の手入れなど、境内の現状から判断できるものをさす。具体的には、境内の掃除、植栽やお供え物の管理、社などの更新や修復、境内の鍵の施錠である。全ての神社において人の手の介入が見られ、放置されている様子のものはなかった（写真1）。

2.4. 神社の複合形態

調査した神社の中には敷地を他の建物や機能と共有する例があった。複合している機能は町会会館、公園、防災倉庫などまちに関係するものが多い。また、屋上にある神社は建物の機能と敷地を共有するため、SC⁶⁾、オフィス、ホテルなどと複合する。

2.5. 小結

都市の発展と建築の多様化により神社の敷地形状や複合形態も様々であるが、都市においての存続性と高水準の管理を有することが分かった。



▲写真1 神社の管理状況

3. 神社の運営実態

3.1. 概要

本章では、都市における神社運営の実態についての調査・分析のため、神社を運営管理している人や組織を対象に、2013年7月18日～12月21日の期間にヒアリング調査を行った。調査対象は以下の4点のいずれかにおいて特色が伺える神社、計21社である。質問内容は主に以下の4点である（表1）。

- 1) 歴史：神社の由緒や現在の形態への経緯
- 2) 運営：神社の運営管理や周辺地域との関わり
- 3) 境内：敷地や配置、複合する機能について
- 4) 社殿：社などの意匠や制作者について

3.2. 分析

3.2.1. 歴史

調査した神社の起原は、最も古いもので平安時代初期、江戸時代またはそれ以前から続くものが多く、最も新しい神社では1954年となっている。現在の敷地については近代に移転したものを除き、その由来が不明である神社が多い。町内での移転や敷地形状の変化はしばしばあるが、大きく移転する神社は殆どない。これは氏子制度や奉賛会など土着的な制度によって神社が支えられていることに起因する。

移転に至る理由は、1) 震災や戦災後に社を再建した地にそのまま残る、2) 神社の存続に関わる問題が起きる、3) 再開発によって整備される、などである。このような情報は震災や戦災でほぼ焼失している（図3）。調査で得た情報は口伝や経験によるもの、戦後それらを再び活字にしたものであり、継承方法については必ずしも整備されているとは言い難い。

3.2.2. 運営

運営主体は町会、宮司、企業、団体、地域の有志のいずれかに分類でき、各々の管理のあり方は異なる。

・町会・地域の有志

日本橋地区には町会管理の神社が多い。これは個人所有の稲荷神社が今日まで受け継がれて来たケースが多いことに起因する。掃除や榊の取り替え、お

▼表1 神社インタビュー調査対象

No.	名前	対象	管理
1	久松稲荷神社	町会長、副町会長	久松町会
2	明星稲荷神社	町会長	小網町会
3	小網神社	宮司	小網神社
4	三光稲荷神社	町会長	堀留町二丁目町会
5	豊川稲荷神社	ビル管理人	石塚八重洲ビル
6	福德神社	宮司	福德神社
7	松島神社	宮司	松島神社
8	横山稲荷神社	会長	横山町奉仕会
9	宝田恵比寿神社	会長	宝田恵比寿神社康鼓会
10	水天宮	事務局次長	水天宮
11	薬祖神社	事務局長	東京薬事協会
12	浜町神社	副町会長	浜町二丁目町会
13	七福殿	席務担当次長、顧客担当部長	高島屋
14	竹森神社	町会長	小伝馬町会
15	川上稲荷神社	世話人、前世話人	東日本橋二丁目町会
16	福田稲荷神社	五七会会員	福田稲荷神社五七会、奉賛会
17	初音森神社	宮司	初音森神社
18	矢ノ庫稲荷神社	住職	薬研堀不動院
19	出世稲荷神社	統括部長	堀留町一丁目町会
20	金刀比羅宮	町会長、前町会長	中洲町会
21	相森神社	宮司	相森神社

賽銭の回収など具体的な手入れをする人は限られており、町会は管理費の出資と神社に関連する行事の運営を行っていることが多い。地域の有志の管理の場合も古くからまちの人によって管理されてきたケースが多く、町会の組織や運営に近い。

・宮司

宮司のいる神社は独立行政法人であり、掃除などの手入れや神事の遂行は全て宮司やその親族が行っている。歴史の長い神社であり、祭事の数や規模においてまちの神社とは異なる。運営は祈祷による初穂料や崇敬者からの賽銭、氏子区域をもつ神社では氏子からの奉納金を基盤としている。

・企業・団体

江戸時代に商業の町として栄えた日本橋には、商売繁盛のために神社を持つ企業や団体が少なくない。特定の人のみの参拝を目的とするため社は屋上に配置されるケースが多く、その存在を知らない人も多い。管理は企業の人が行うが、植栽の管理や掃除の手間は他の神社と比較して少ない（写真2）。神事の際には付き合いのある神社から宮司を招く。

3.2.3. 境内

境内や社の形態は様々である。中規模の神社では本殿と手水舎と植栽という構成が一般的であるが、敷地がビル化され社殿を屋内に持つ物や、50cm四方の社のみで殆ど敷地を持たないものがある。

また、機能を複合する神社もある。公園が隣接する竹森神社では、公園と車道を一体として祭を行う（写真3）。このように境内の大きさや複合する機能は行事の内容や規模と関係づけられている。

3.3. 小結

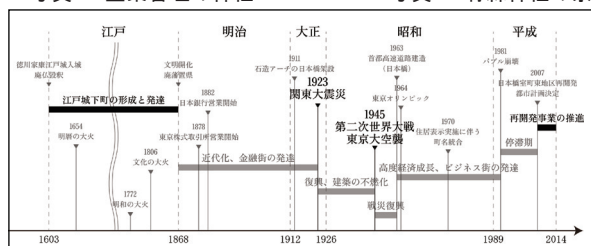
日本橋地区の神社は長い歴史の中で敷地形状を変化させてきた。更には複合機能を有するなど、現代において神社の境内は多様化しており、運営や行事の内容・規模に少なからず影響を与えている。

運営主体は、1) 町会・地域の有志、2) 宮司、3) 企業・団体に分類でき、それぞれ管理のあり方が異なる。また神社の周囲には氏子や別の神社など、見かけ以上に多くの関係者がいることが分かった。



▲写真2 企業管理の神社

▲写真3 竹森神社の祭



▲図3 日本橋の歴史と災害についての年表

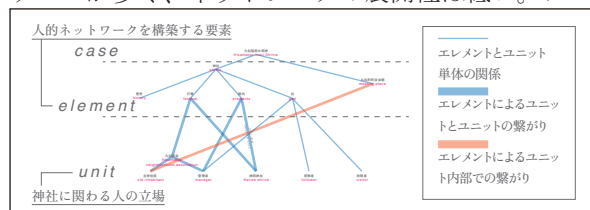
4.1. 概要

＜ネットワーク図とは＞

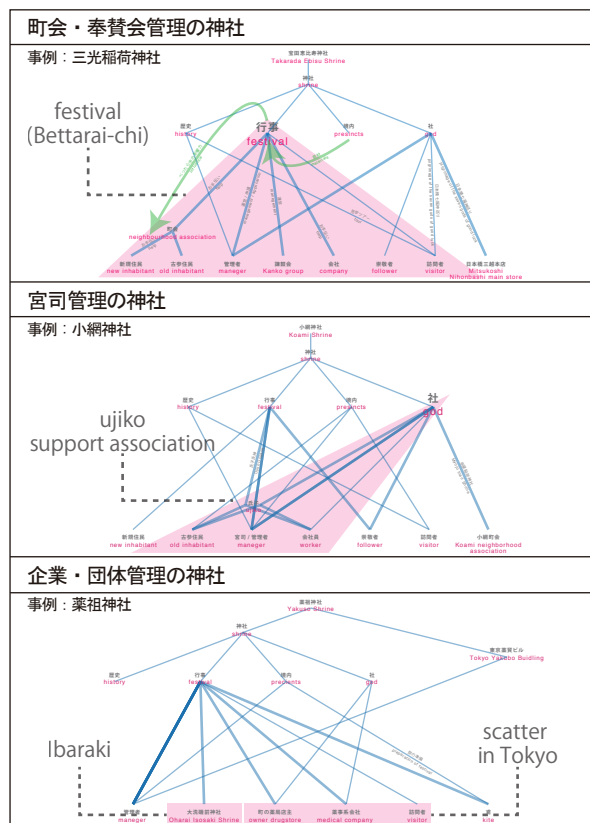
4.2. 運営団体別にみるネットワーク図

4.2.1. 町会・奉賛会

町会や奉賛会によって管理される神社は、祭を中心にネットワークを展開している。稲荷神社にとって大切な行事である初午祭では宮司を呼び、町会の幹部や世話人が一同に集まる。屋台が並ぶような大きな祭では新規住民や周囲の会社員、観光客なども多く参加する。境内においては駐在する人がいないケースが多く、ネットワークの展開性は低い。v



▲図4 ネットワーク図判例



▲図5 運営団体別にみる構築ネットワーク

宮司が管理する神社には2種類ある。氏神社はまちの氏子制度や奉賛会といった団体によって支えられており、定期的に開かれる行事で彼らと接する。また不動産を副収入のために扱う神社では、まちの組織とは全く別のネットワークを構築している。崇敬神社は全国から来る参拝者に支えられており、まちと関わることは他の神社と比較して少ない。

4.2.3. 企業・団体

特定の企業や団体の信仰の対象のため、まちに対しては閉鎖的なネットワークになる。一方で地方の神社や東京中に関係者がいることもあり、広範囲にスポッ的に根を張った独特の構造をしている。

4.3. ネットワーク構築要素

4.3.1. 祭

祭はユニット同士を結びつける力の強いエレメントである。祭はどの神社でも行われおり、関係するユニットは一同に会する。祭の規模が大きくなるに応じてユニット数も増加する。また、準備などの運営過程においても同様にユニット同士のコミュニケーションの機会を創出している。

4.3.2. 境内

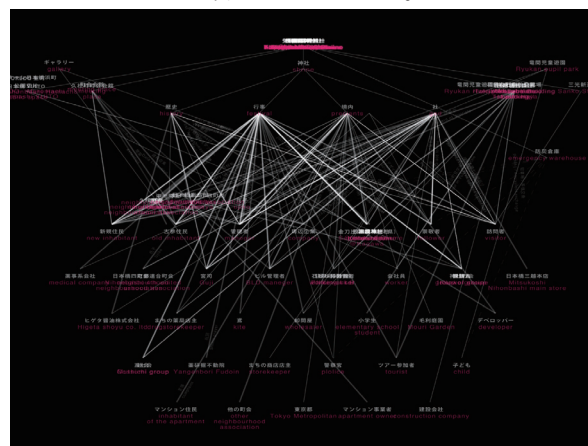
境内は日常的な参拝や管理の中でユニットが接する場所を提供している。また境内の形成や更新の過程においては、社の寄贈やデザインの監修などによって、まちの外部のユニットともリンクさせる。

4.3.3. 複合機能

異なる機能によって普段関係を持つことのないユニットが訪れる。それにより新たな活動が誘発されることが、ユニット同士の繋がりが発生することもある。例えば、竹森神社では公園でラジオ体操する町会婦人部の人々が、体操後に神社を掃除するという一連のアクティビティが生まれている。

4.4. 小結

神社の背後には様々な立場の人がおり、管理運営の中で人的ネットワークが構築されている。特に祭や境内や複合機能には、まちの内外の人を結びつける力が強いことが分かった（図6）。



▲図6 神社の構築ネットワーク

5. Inter Act Network の提案

5.1. 概要

本章では4章で明らかになった神社の構築ネットワークを活用し、災害時に機能するシステムへの応用可能性を示すことを目的とする。

5.2. セミラティス構造のツリー構造の顕在化

神社の構築ネットワークはアレグザンダーの言うセミラティス構造⁶⁾であるが、神社の管理や祭は厳密なツリー構造を基盤に運営されている。災害時に機能するシステムも同様に、地域単位においては厳格なツリー構造である必要がある(図7)。

5.3. Inter Act Network

中央区の制定する地域防災計画⁷⁾において、災害時⁸⁾には避難者 44,773 人/帰宅困難者 309,315 人と想定される。しかし防災拠点等に管理される毛布の数は4万枚に満たない⁹⁾。防災計画内で区民は日頃からの防災意識と災害時の自助と共助が促されるだけであるが、地域単位での防災システムが不可欠である。システムはまち単位での行動(Act)と全体をつなぐ機能(Inter-)で構築する。Actはツリーによるボトムアップの活動でありInter-はそれらをゆるく繋ぐトップラティス構造¹⁰⁾とする(図8)。

5.4.1. 祭ネットワークによる避難誘導

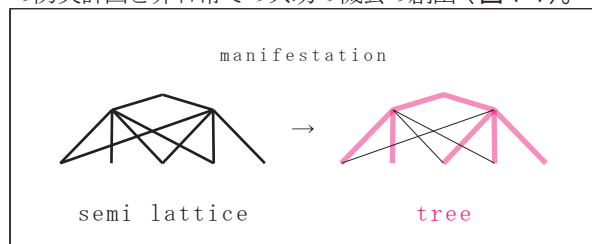
江戸時代から続くべつたら市の運営行、諫鼓会会長をツリーの頂点とする避難民誘導モデルの提案(図9)。

5.4.2. 境内ネットワークによる被災情報の共有

まちな商店主と隣接するまちに日常的繋がりを持つ神社管理者をツリーの頂点とする地域連携による被災状況の収集・拡散モデルの提案(図10)。

5.4.3. 複合利用による日常的防災

神社と公園と町会会館の複合を格とした、日常からの防災計画と非日常での共助の機会の創出(図11)。



▲図7 セミラティス構造のツリー構造の顕在化

5.5. 全体を統治する「ゆるい」ネットワーク

まち単位での活動を可視化・共有する情報プラットフォームを提案する。このプラットフォームはオンライン上に構築され、日常的に用いるウェブサイトからパターンシフトすることによって高いアクセシビリティを有する。

6. 結論

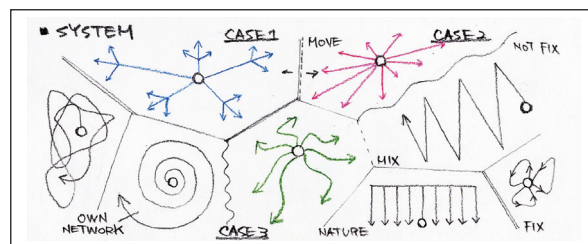
本研究では以下のことが明らかとなった。

- ・都心の神社は廃社せず、また移転の可能性も低く、都市の不動点であることが分かった。神社形態や運営方法は他機能と複合するなど多様性が見られた。
- ・神社の背後には人的ネットワークが構築している。実態は運営団体によって大きく変異する。特に祭の運営には多くの関係者がおり、定期的な開催によってつながりを持ち続けている。
- ・非常時にはまち単位での活動と全体をゆるく繋ぐシステムが考えられる。地域での活動は各々のネットワークを活かした最適な手法を行うべきである。

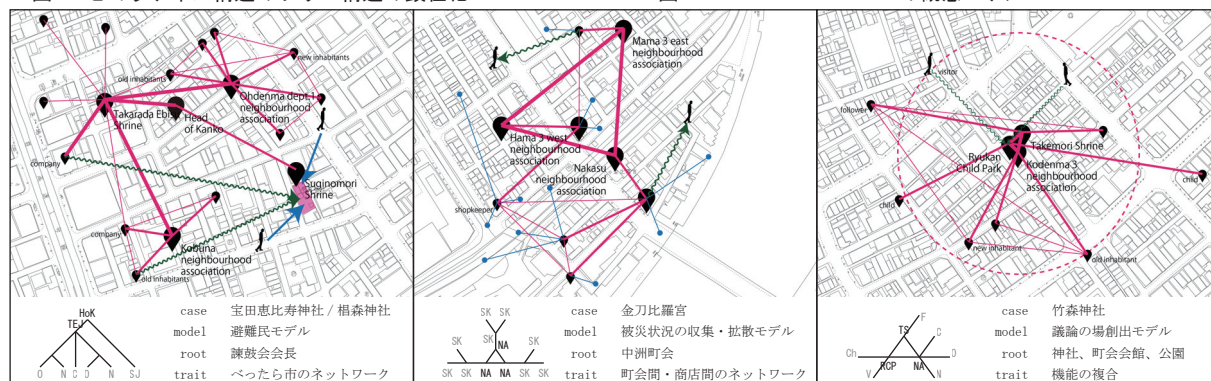
日本橋地区は新規住民の増加により変化の過渡期にある。様々な人が関わる神社には、まちの抱える問題を解決するきっかけとしての可能性がある。

脚注: 1) 内閣府によるインターネット調査に基づく推計より 2) 参考文献1[2章/信仰について]より 3) 同[2章/日本橋の神社数]より 4) 同[2章/本橋の神社数]取り上げられていた全64社から寺院、矢ノ倉三社、屋上にある神社の一部(振分、文布、和合、浮洲、伏見、於岩)を除き、出世と岩代を分離した 5) SC=ショッピングセンター 6) 参考文献2より 7) 参考文献3より 8) 参考文献3[概要版p6 中央区の被害想定/東京湾北部地震(東京都公表2012年4月18日)]より 9) 参考文献3[資料編p48,49 毛布・ゴザ保管状況(2013年3月31日)]より 10) latticeは集合論において束という意味であり、本論ではトップラティス構造とはシステムの上部構造が下部構造を関連づけるという意味で用いる。

参考文献: 1) 「東京都心部に置ける神社建築の空間特性と利用に関する研究-旧東京市日本橋地区を事例として-」(2008)/宮城朝亮(千葉大学大学院自然科学研究科) 2) 「都市はツリーではない」(1965)/クリストファー・アレグザンダー 3) 「中央区地域防災計画」(2013)/中央区 4) 「ビジュアル・コンプレキシティ-情報パターンのマッピング」(2012)/(著)マニユエル・リマ、(監修)久保田晃弘、(翻訳)奥いずみ 5) 「これからの防災・減災が分かる本」(2008)/(著)河田恵昭



▲図8 Inter Act Network の概念モデル



▲図9 宝田恵比寿神社・相森神社モデル ▲図10 金比羅宮モデル

▲図11 竹森神社モデル